

# 元禄期の笑話集における希望表現について

柴田 昭二  
連 仲 友

## 目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

### 一、はじめに

本稿は、別稿<sup>①</sup>を受け、元禄期の笑話集を研究資料として、それにおける希望表現<sup>②</sup>の実態を説明しようとするものである。

江戸開幕から約一世紀の時を経た元禄期において、戦乱の世から太平の代に大きく変わる中で、文化的な活動が盛んに行われるようになった。文芸の面では、浄瑠璃・歌舞伎の近松門左衛門、浮世草子の井原西鶴、俳諧の松尾芭蕉がその中心として創作活動を推進し、華麗な元禄文化を創造した。さらに出版の隆盛により、これらの文芸が庶民にまで拡大し享受されるようになったことが、元禄文化の特徴である。

「醒睡笑」「きのうはけふの物語」の出版によって民間に広がった笑話の系譜においても、江戸に鹿野武左衛門、京に露五郎左衛門、大坂に米沢彦八が輩出し、笑話を語る場を設け、庶民に口演するとともに、語った笑話を出版することによって笑話あるいは軽口、辻咄と呼ばれるものが世に広く知られる存在となった。本稿は右の三人を中心に、主に元禄期に出版された笑話集（以下、軽口本）を調査対象とする。

テキストには、武藤禎夫 岡雅彦編『噺本大系』第五卷・第六卷・第七卷（東京堂出版 昭和五〇年・五一年・五三年初版）を用いる。使用した軽口本は次の通りである。

元禄期の笑話集における希望表現について

鹿野武左衛門「鹿野武左衛門口伝はなし」（天和三年（一六八三）刊）

同「鹿の巻筆」（貞享三（一六八六）年刊）

同編集「枝珊瑚珠」（元禄三（一六九〇）年刊）

露五郎兵衛「軽口露がはなし」（元禄四（一六九一）年刊）

同「露新軽口はなし」（元禄一（一六九八）年刊）

同「露五郎兵衛新はなし」（元禄一四（一七〇一）年刊）

同 遺稿「露休置土産」（宝永四（一七〇七）年刊）

米沢彦八「軽口御前男」（元禄一六（一七〇四）年刊）

作者不詳「遊小僧」（元禄七（一六九四）年刊）

作者不詳「初音草噺大鑑」（元禄一一（一六九八）年刊）

作者不詳「軽口ひやう金房」（元禄頃刊）

### 二、希望表現の構成形式

調査に使用した軽口本における希望表現と認められる構成形式とそれぞれの総用例数は以下の通りである。

「まほし」	一例
「たい」	六九例
「ばや」	三例
「がな」	三例
「かし」	六例
「たまへ」	七例
「ほし」	一五例
「欲す」	一例

「欲」	一七例
「ねがふ」	二四例
「願」	一八例
「のぞむ」	一五例
「望」	七例
「いのる」	一九例
「祈」	六例

以上から見られるように、希望を表す助動詞では「まほし」と「たい」が見られ、「たい」の用例数が最も多い。終助詞では「ばや」「がな」「かし」が見られるが、いずれの用例も少ない。慣用的用法の「たまへ」は神仏に対するものが希望表現となる。形容詞では「ほしい」のみが見られる。動詞では「欲す」「ねがふ」「のぞむ」「いのる」が見られ、またそれらに関連する「願」「望」「祈」を含む字音読みの複合語が見られる。名詞では漢字表記の「欲」「願」が見られる。

### 三、各形式の用法

#### 1、「まほし」の用法

まず、「まほし」の用法を見る。軽口本に「まほし」が一例のみ見られる。

- (1) ある人諸事世話らうしけれと世の気はらしに桜にちりはめて見せまほしと、  
ひたすらに云もすてかたくて、そのひとくの名をあらわしてかけり。

(鹿野「枝珊瑚珠」稜 六・三四頁)

例(1)は鹿野武左衛門の「枝珊瑚珠」の絵師石川流宣による稜文の用例であり、「まほし」の「ほ」に濁点が付されている。他に「まほし」の使用例は管見になく、マボシと読んだか、誤刻か不明。「世の中の気晴らしに桜のようにちりばめて見せたい。」の意と解され、希望表現の下位分類の「願望」を直接に「表出」する用法である。

#### 2、「たい」の用法

次に、「たい」の用法を見る。軽口本に「たい」は六九例見られ、希望表現の

構成形式として用例数が最も多い。また、そのうち派生語動詞「たがる」が八例含まれている。

- (2) 唯けふのもてなしの餅をくいすごして、むねのやけるがくるしいといひければ、おれもちと、その類火にあふて見たひよ。

(露「軽口露がはなし」六・四二頁)

- (3) 亭主はらをかへ、さても珍しい鯛かな。お江戸八万事大きなと申が、一度八下りましたといへば、

(不詳「初音草断大鑑」六・一四四頁)

- (4) ひとりがいふ。それにつき、かみなりの鳴るときひかるいなづまを、地しんのさきへつけたい。

(不詳「初音草断大鑑」六・一五一頁)

例(2)～(4)は会話における用例である。「そのような胸やけは私もちよつとあやかりたいよ。」「一度は江戸へ下りたいものだ。」「雷が鳴る時に光る稲妻を地震の前に光らせたい。」の意と解され、いずれも話者自身の「願望」を直接「表出」する用法である。

- (5) よしありて禅僧の来たりけるに、近所の人あつまりて、法のしめしを請たまわりたきなど、こそつて申けるに、

(鹿野「枝珊瑚珠」六・四頁)

- (6) 上京新在家あたりを、三十斗の男とをりけるに、にしの方よりとしころ成女房、下女壱人めしつれ来るとて、此男をミてほやくと笑より、楚忽ながら、其方さまを私所へ御供申たきと語る。

(露「軽口露がはなし」六・四七頁)

例(5)～(6)は文末を「たき」で終止する、連体終止法の用例である。「仏法の靈験を受けたい。」「あなた様をお連れしたい。」の意と解され、話者の「願望」を「表出」する用法である。

- (7) 八十の親父も、若ふならしやりましたの祝言葉、福の神や御万歳、大黒舞の打出のこつち、かたげたき知恵袋よりハ、何なりともこのむ物も取出し、あたふべきと有しかハ、

(不詳「軽口ひやう金房」序 六・二六一頁)

(8) 有時、近所の衆、江戸へ下る用有れば、ふやにいき云やう、用事に付、江戸へいくが、其方の腰より上へ、伝言でもしられんかと尋けれハ、ふやの腰より下のもの云やう、成程頼みましたい事がござりまする。  
(不詳「軽口ひやう金房」六・二七六頁)

例(7)(8)は連体修飾語としての用例である。修飾語は「たき」「たい」の二形が見られ、「肩に担ぎたい知恵袋から取り出して、「お頼みしたい事がござりまする。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(9) さるおやじ、山崎の開帳に、うち出の小づち一はいのおもひ入で参詣し、小つちおかミ度よしへば、小僧立より、槌をおがませ、たからさづくるが、  
(米沢「軽口御前男」六・二五六頁)

(10) 東国のはてより座当老人上り、六条様へ行てあんないこひ、ぜひに御門跡様に御目にかゝり、御手をにぎり度よし申上げる。  
(不詳「軽口ひやう金房」六・二八三頁)

例(9)(10)は「たい」の連体形「たき」に形式体言「よし」が下接した慣用的用法である。「小つちを拝みたい旨を言ったところ、「ぜひ御門跡さまにお目にかかり、御手を握りたい旨を申しあげた。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(11) かれか所にてと、のゆる事、御祝事に、さるや不吉なり。せひうりたくは家名をかへよと仰ければ、かしこまり候とてかへり、猿に扇をもたせたり。  
(鹿野「枝珊瑚珠」六・七頁)

(12) これハあちらこちらへしたきものなりといへば、そばなるものがいふやう、それほど思ふやうにしたくハ、地しんを空でゆらして、神なりを地の下でならせたいものじや。  
(不詳「初音草断大鑑」六・一五一頁)

例(11)(12)は「たく」に「は」を下接して仮定条件を表し、「ぜひとも売りたいのなら猿屋という屋号を変えよ」「それほど自分の思うようにしたいのなら、地震を空で、雷を地下でさせたいものだ。」の意と解され、「願望」を「説明」する

元禄期の笑話集における希望表現について

る用法である。

(13) すでにかんをする所へ、大上戸の友、此ほどハおめにか、らぬとて来る。さてもきのどくや。はやくのミたけれど、こゝで出せば酒たらず。いつ立んもしれずと、あんじわづらひけるが、  
(不詳「初音草断大鑑」六・一六七頁)

(14) 打くびにあふ時、さられるハおほえぬが、その前かた、首すぢなであげるが気味がわるい。(略) きらるゝものに問たいけれど、かたびんぎでしれませぬといふた。  
(米沢「軽口御前男」六・二四八頁)

例(13)(14)は従属節における用例である。「すぐに飲みたいけれどもここで出したら酒が足りない。」「頸を切られる人に聞きたいが、返事がもらえないのでわからない。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(15) ある所にて、人々よりあひ碁をうちしに、其中にきかへて助言したがる者ありて、わきより、きれの、おさへのといふ。  
(不詳「初音草断大鑑」六・一七九頁)

(16) いやく、しゆびのわるい事ハない。そんならどうで御さんす。さらば、そちにおやじがあひたがるといふた。  
(米沢「軽口御前男」六・二五九頁)

例(15)(16)は「たい」の派生語動詞「たがる」の用例である。「衆人の中に碁の助言をしたがる者がいて、「親仁があなたに会いたがる。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

### 3、「ばや」の用法

次に、「ばや」の用法を見る。軽口本に「ばや」は三例見られる。

(17) さてハほとけハしひふかし。神にいのらはやと、長田ばにまいりて、山王権現のいのり奉る。  
(鹿野「枝珊瑚珠」六・二九頁)

(18) われはかりならず、つかわしめまできやりにゆへと、いかにせんとあれば、とかく神のつかさなる大神宮をいのらばやと、芝の神明よりうぐわんせしかは、  
(鹿野「枝珊瑚珠」六・二九頁)

(19) おのくなんと、あの月と此つはと、大きさハとちらでござらふと、わきざしをぬき出してミせければ、人く、れいのせんしやうをするに、ちとあてばやとおもひ、されバ、その金つばによう似た月でござる。  
(不詳「初音草嘶大鑑」六・一九二頁)

例(17)(18)(19)は心中の思いを表現する用例で「神に祈りたいと思つて、山王権現にお祈りをした。」「ともかく神の府である芝の太神宮を祈りたいと思つて、明神へ立願した。」「人々が威張つた武士にちよつと言わせてみたいと思ひ、」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

#### 4、「がな」の用法

次に、「がな」の用法を見る。軽口本に終助詞「がな」は三例見られ、そのうち「もがな」が二例、「がな」が一例見られる。

(20) 一日に千里も行車もがな、洛外の花見をせん。円山、霊山、双林寺の遊山所ハ、卅日も前よりからねばならぬと、円山の花見振舞。  
(不詳「遊小僧」六・八七頁)

(21) 人の親ご、ろハ闇にはあらねど、子を思ふことハ霜夜の鶴よりもふかし。世のおぼえゆたかならん聲もがなと、明くれ物ねがふ母の親。  
(不詳「初音草嘶大鑑」六・一三六頁)

例(20)(21)は「もがな」の形で古体の文中に用いられ、「一日で千里も行ける車がほしい、」「世間の評判の良い聲がほしいと日夜願う母親。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(22) 気がさで過る牢人、此比はりをたて習ひ、事がなとおもふ所へ、近所より病人ありて頼ければ、何心なく針たてしが、此はりぬけず。  
(米沢「軽口御前男」六・二五四頁)

例(22)における「事がな」は連語として語り口調の文に用いられ、「何か事があればよいと思つていたところに、」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

#### 5、「かし」の用法

次に、「かし」の用法を見る。軽口本には希望表現の「かし」は六例見られ、鹿野武左衛門の「鹿の巻筆」と「枝珊瑚珠」に三例ずつ用いられている。

(23) 又酒一とくり、是もたんさくあり

じやうと酒やとくりと是をまいれかし  
へつに新酒をそへてしんらん  
(鹿野「鹿の巻筆」五・二二四頁)

(24) しゃうぎ経とてきやうもあり。とかく是にもとつき給ひかしといわれけるに、与市左是をきいて、げにく源州の仰せもつともなり。せめてハ是に給へかし。  
(鹿野「鹿の巻筆」五・二〇七頁)

(25) 明日よりかほミせに出るといふて、米かしのわかものともたのミけるハ、はしめてなるに、なにとぞ花を出してくだされかしとたのミける。  
(鹿野「鹿の巻筆」五・二一九頁)

(26) 所の者、雷鳴門に來りなげきけるは、只今並木の家は一有ものこさすやけおち候へし。あわれ風の三郎との。かぜかわらせてたまわれかしといへば、  
(鹿野「枝珊瑚珠」六・五頁)

例(23)～(26)は動詞命令形に付く「かし」の用例である。例(23)は歌の中に、例(24)～(26)は会話に用いられ、「上等な饅頭と酒を召し上がってください。」「せめてこのやり方にしていただきたい。」「どうか飾りの花を出してください。」「風向きを変えていただきたい。」の意と解され、いずれも希望表現の低位分類的「希求」を「表出」する用法である。動詞命令形に下接する「かし」が強い希望を表す用法は中世以降に使用され、この時代に盛んに用いられるが、調査範囲の軽口本には、鹿野武左衛門に関する文献にのみ使用され、他に使用例を見ない。京の露五郎左衛門、大坂の米沢彦八に「かし」の用例がないことに明確な理由は不明である。

## 6、「たまへ」の用法

次に、「たまへ」の用法を見る。軽口本に希望表現と認められる「たまへ」は七例見られる。

(27) とかく浅草の観世音は、らいけんあらたにましませは、建立の内寿命をのべたまへといのりけるに、七日にまんする朝た、鳥目百錢ひろいたり。

(鹿野「枝珊瑚珠」六・一七頁)

(28) 殊に観音様ハ慈悲第一の仏にて御座候に、何とぞ仕合致候様ニ守らせ給へと、一七日こもりけるが、(露「露新軽口がはなし」六・一九六頁)

例(27)(28)における「たまへ」は、「給ふ」の命令形を取り神仏への祈りを表し、「寿命を延ばしてください。」「どうぞ幸せにいられるようお守りください。」の意と解され、いずれも「希求」を「表出」する用法である。

## 7、「ほしい」「欲す」「欲」の用法

次に、「ほしい」「欲す」「欲」の用法を見る。軽口本に形容詞「ほしい」は一五例、動詞「欲す」は一例、漢字表記の「欲」が一七例見られる。

(29) 五盃のふでハ五両もらひ、金銀ハ空よりやふりけん地よりやわきけん、親のゆづりの銀箱は確のふみだんになり、十軒口を棒にふり、浅ましき姿になりても、かねのなる木がほしいといふ。(不詳「遊小僧」六・八二頁)

(30) 盆にハおどるといふて、ひんなるもとみたるも、おもひくくにゆかたをこしらへけり。かごかきの子も、ゆかたほしいとせがめハ、せんかたなく、もめんをかいけれとも、染ちんいかにしてもなりがたけれバ、

(不詳「軽口ひやう金房」六・二八五頁)

例(29)(30)は会話文における用例である。「金のなる木がほしい。」「浴衣がほしい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(31) このような咒の札、家々にあるを見て、そさうなる人、札ハほしけれども

元禄期の笑話集における希望表現について

銭出す事ハいやなり。

(露「露五郎兵衛新はなし」六・二二九頁)

(32) 哥などハ思ひもよらぬ事。あの山ぶき色な新小判が、弐三千両もほしい事じゃ。(露「露休置土産」七・四二頁)

例(31)(32)は「粗忽な人は札はほしいが金を出すのがいやなものだ。」「山吹の歌などでなく、山吹色の新小判が二、三千両ほしいことだ。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(33) 旦那参られて、小僧をちかくよびて、あの児ハどなたの子なればバ、あのやうにうつくしひぞといふ。小僧、あれハ屋敷方のお子なり。爰の弟子に成に御出有といふ。旦那き、て、おれが思ふやうならバ、あの児を女子にしてほしひと申せば、小僧がいふやう、いづれ人の目は九分十分じゃ。さたハないこと。長老様も左様ニ御申あるといふた。

(露「軽口露はなし」六・四一頁)

(34) ある寺がたに美目よき小姓有けり。心やすき旦那参られて小僧をよびて、あの小姓ハ、いづ方よりか、へさせられた。名ハ何といふぞととふ。小僧、あれハ去浪人衆の子でござる。名ハ花崎作弥殿といひまするといふ。旦那きいて、さてもくちよつとあるまい器量じゃ。おれが思ふやうならバ、あの子を女子にしてほしいといへば、小僧がいふやう、いづれ人の目ハ九分十分でござる。さたはなないこと。長老様もさやうにおしやりまするといふた。

(不詳「初音草断大鑑」六・一〇七頁)

(35) さる寺にうつくしき、それハことばにものべがたき二八ばかりの小性有。だんな衆まいられ、さてくうつくしき生まれつきかな。さりとハ此市三郎ハ、女にしてほしいことじゃといはれければ、小僧申けるハ、和尚様にも左様のおのぞみにて御座りますといふた。

(露「露新軽口はなし」六・二二三頁)

例(33)く(35)は異なる文献における用例であるが、ほぼ同じ文脈に用いられている。この「ほしい」は対象物をとらず、動詞に接続助詞「て」を介して、現代語の「てほしい」に通じる用法と見られる。いずれも「あの小姓を自分のものにしてもらいたい。」の意と解され、他者に向けた「希求」を「表出」する用

法である。

(36) 或人又とふハ、それにつき具足のさし物のうけ筒をさす物を、がつたりとハなせに申ぞといへバ、されバこそ大事のことを御尋なさる。それ侍ハ先知行をほしがつたり、又手がらをしたがつたり、其上命をおしがつたり、とかく、がつたりがなふてかなはぬ物じやといふた。

(不詳「初音草断大鑑」六・一三九頁)

(37) 酒ずきなる人、とかく相手をほしがりけれども、折ふし所の神事にて、近所の人ハ来ず。

(露「露休置土産」七・六〇頁)

例 (36) (37) は「ほし」の派生語動詞「ほしがる」の用例である。「侍というものはまず領地をほしがつたり、「酒好きの人は一緒に飲む相手をほしがるものだが」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(38) 碧岩集二曰、仏の性義をしらんと欲せは、当しせつ因縁を觀す。

(鹿野「枝珊瑚珠」六・四頁)

例 (38) は禅宗語録「欲知仏性義、当觀時節因縁」の読み下し文である。原文における「欲」は願望を表す助動詞として、「〜んと欲す」と訓読するのが一般的である。この例は「仏の性義を知りたいのならば」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(39) ある山家に欲ふかきうばあり。

(露「軽口露がはなし」六・四八頁)

(40) 富は屋をうるほし、出家ハ無欲をよしとす。

(不詳「遊小僧」六・一〇〇頁)

例 (39) (40) はともに話の冒頭における用例である。「欲」「無欲」は字音語として一般的な「欲望」の意を表し、いずれも名詞用法である。

## 8、「ねがふ」「願」の用法

次に、「ねがふ」「願」の用法を見る。軽口本に「ねがふ」は二四例、字音読み

の「願」は一九例見られる。

(41) 本庄ニツ目に安楽と云町人あり。うき世の世話をしもふたや隠居してすみり。我か此世のおもいてに、稲荷の宮のこんりうをねがひけれど、六十に余りて明日の命も知れかたし。

(鹿野「枝珊瑚珠」六・一六頁)

(42) さるおやぢ、寿命をねがひ、清水にまふで、われ百迄のじゆみやうをあたへさせたびたまへとて、七日まふでけるに、

(露「露新軽口はなし」六・二〇八頁)

例 (41) (42) は「稲荷宮を建立することを願ったが、「長寿を願つて、」の意と解され、動詞用法である。

(43) 御告あり。汝うらむる事なかれ。よく分別して神をものれ。分在に過たる願ハ得さしがたし。

(露「軽口露がはなし」六・五一頁)

(44) 去方に召つかはる、侍、病氣につき湯治のねがひを殿へ申上ければ、いかにも、いとまをとらす程に、

(不詳「初音草断大鑑」六・一六〇頁)

例 (43) (44) は「身に過分な願いは叶えがたい。「湯治に行く願いを殿に申しあげると、」の意と解され、動詞連用形の名詞用法である。

(45) 朝にてきやくしうもみやらいで、なにともきのどくに存ます。あわれねがわくハ、さんばそうを、きりきやうげんになされてくだされませいとわれた。

(鹿野「鹿の巻筆」五・二二三頁)

(46) わかみのうへのやうにて、めいわくに御座ります。ねがはくハ此哥やめさせたまわれかした、その夜ハつやしける。

(鹿野「枝珊瑚珠」六・二八頁)

派生語「ねがはくは」は軽口本に四例見られる。例 (45) における用例は文末の命令形と呼応し、例 (46) における用例は文末の命令形に「かし」が下接して、「三番叟を狂言の切りにしていただきたい。「この歌をやめさせていただきたい。」の意と解され、「希求」を「表出」する用法である。

(47) 謡の稽古する人、参会してはな咄すつみでに、楊貴妃の曲舞に、天にあら  
バねがハくハ比翼の鳥とならんとあるが、いかやうな鳥じやといへバ、

(不詳「初音草断大鑑」六・一一四頁)

(48) しゃばの業にまかせて、八大ちごくの石こづめにせよとおほせられ、扱ひ  
とりのものをめし出し、汝ハかりにも無常を觀したれバ極楽へつかハすと  
あれバ、かの者、ねがハくハひとつちごくへまいりたいといふ。

(不詳「初音草断大鑑」六・一八七頁)

例 (47) (48) における「ねがはくは」は文末の「ん」「たい」と呼応し、「天  
にあれば比翼の鳥になりたい。」「相方と同じ地獄に参りたい。」の意と解され、  
「願望」を「表出」する用法である。

(49) それかるたハ人間のせいすいのもと。されば仏法にいわんにハ、まづ四十  
八枚ハミだの四十八くわんなり。

(鹿野「鹿の巻筆」五・二〇六頁)

(50) ふや町のほてい葉師へ願をかけかへ、向後われ一代の間ハ布袋をくハぬと  
いふて、蛸のさいしんを乞たり。

(露「軽口露がはなし」六・四六頁)

(51) 去八百屋、観音へ願かけ、私久くあきなひいたし候へ共、不仕合にて何  
共迷惑仕候。

(露「露新軽口はなし」六・一九六頁)

例 (49) における「四十八願」は仏教用語として、「阿弥陀如来が立てた四十  
八の誓願」のことであり、例 (50) (51) における「願」は神仏に対する願いであつ  
て、いずれも名詞用法である。

## 9、「のぞむ」「望」の用法

次に、「のぞむ」「望」の用法を見る。軽口本に「のぞむ」は一四例見られ、字  
音読み「望」は七例見られる。

(52) ぬす人などにほゑる事、よのいぬに八十ばいせり。三郎兵衛つねにのぞむ。  
されども、あいたなにもぞむ人おほけれハ、ついにとらせず。

(鹿野「鹿の巻筆」五・二二四頁)

元禄期の笑話集における希望表現について

(53) よろづ無芸なる者、祝言ふるまひにゆきしが、酒宴のさいちうになりて、  
何ぞおさかなをとのぞまれ、しさいらしくこハづくろいして、あらいたハ  
しや人くハと、説経をかたり出す。

(不詳「初音草断大鑑」六・一七六頁)

例 (52) (53) における「のぞむ」はいずれも「希望する」の意の動詞用法である。

(54) 此おとこ目をさまし、すこしりくつをこねたり。稲荷とハいねをになふと  
読なれば、百性の望こそかなふべし。

(露「軽口露がはなし」六・五一頁)

(55) さりとハ此市三郎ハ、女にしてほしいことじやといはれければ、小僧申け  
るは、和尚様にも左様のおのぞみにて御座りますといふた。

(露「露新軽口はなし」六・二二三頁)

例 (54) (55) は「農民の望みが叶うだろう。」「和尚様も同じ望みを持ってお  
いでです。」の意と解され、「のぞみ」は名詞用法である。

(56) 日くれてもくるしからさる間、ぬかずに三ばんしてしてくれいと所望せら  
れた。

(露「武左衛門口伝はなし」五・二〇〇頁)

(57) こ、に可右衛門といふ人、うき世を酒にくらして樂しミしが、つるに内損  
たのミすくなき末期にのぞミ、物領に遺言するやう、我此病にて死なんこ  
と一生の本望也。

(不詳「初音草断大鑑」六・二二三頁)

例 (56) における「所望」は「三番の狂言を抜かずにしてくれと求めた。」の  
意であり、動詞用法である。例 (57) における「本望」は「この病気で死ぬのが  
もとの望みだ。」の意であり、名詞用法である。

## 10、「いのる」「祈」の用法

次に、「いのる」の用法を見る。軽口本に「いのる」は一九例、字音読み「祈」  
の複合語は六例見られる。

(58) むかしもしゆんじやうほう、諸国をくわんじんして大仏とこんりうし、大伽藍のくよふせしに、六十にあまりければ、命あやうしと清水にいのりける。  
(鹿野「枝珊瑚珠」六・一七頁)

(59) おろかなる人のならハしと、恋ハむすぶの神にいのり、ちからハ仁王にやつかいはかけてねがふ。  
(不詳「初音草断大鑑」六・一九三頁)

例 (58) (59) は「延命を清水寺に祈った。」「恋は縁結びの神に祈り、」の意と解され、動詞用法である。

(60) 上京にひとりの職人あり。朝夕を送りかねあけるが、とかくは氏神へ祈りをかけ、急に富貴に成べしと思ひ、御霊明神へ七日詣でいたし、  
(露「軽口露がはなし」六・五一頁)

例 (60) における「祈り」は「氏神へお祈りをして、」の意と解され、動詞連用形の名詞用法である。

(61) 女ご、ろのはかなく、夫にをくれてほどなきころ、梓神子をよびて口をよせさせれば、神子た、り月をいふて祈禱をし、ものをとらんとおもひ、ことしハた、り月がおほい。祈禱をせずハあしからふといふ。  
(不詳「初音草断大鑑」六・一四七頁)

(62) 或所に、ばくちずきなる息子あり。(略) せんかたなくて清水の観音へ参り一心にきせいし、扱みくじをとりて、親人まことに、打切給ふならハ、ニをたべ。  
(露「露休置土産」七・四九頁)

例 (61) (62) は「祈」の複合語の構成要素である。例 (61) における「祈禱」は名詞用法、例 (62) における「祈誓」はサ変動詞で動詞用法である。

#### 四、おわりに

以上、軽口本における希望表現の構成と用法を考察してきた。

助動詞「まほし」は「まほし」として一例見られるが、稗文における書き言葉

としての用例である。「たい」は用例数もつとも多く、派生語にも使用される。その表記は「たい」「たひ」「度」が区別なく用いられる。文末には「たい」および「たき」による連体形終止法が見られ、また、連体修飾語にも「たい」「たき」の二形を取る。

終助詞「ばや」は三例見られ、すべて心中の思いを表す「願望」を「表出」する用法である。「がな」は三例見られ、そのうち二例の「もがな」は古体の文脈に用いられ、一例の「事がな」は連語として用いられ、いずれも「願望」を「説明」する用法である。動詞命令形に下接する「かし」は六例見られるが、いずれも鹿野武左衛門の著作にのみ用いられている。「かし」は動詞命令形に付いて強い希望を表す用法で中世以後に多く使用されるが、軽口本では鹿野武左衛門の著作にのみ見られ、他の文献には使用例を見ないのが特徴的である。因みに鹿野武左衛門は大坂に生まれ、後に江戸に出て生業を得た経歴が序文に記される。なお、鹿野武左衛門に関する著作はいずれも江戸の書肆による刊行である。

「たまふ」の命令形「たまへ」は多く見られるが、そのうち神仏に対して祈る場合は希望表現とみなす用法である。

形容詞「ほし」には新たに「てほしい」の用例が見られ、現代語と同様に他者に対する「希求」を「表出」する用法で用いられる。

「ねがはくは」「欲す」は用例が少ないが、いずれも漢文の読み下し文の語感を伴う。「ねがはくは」は文末の「ん」「たい」と呼応して「願望」を「表出」し、動詞命令形と呼応し、更に「かし」と呼応して「希求」を「表出」する。「欲す」は「願望」を「説明」する用法で使用される。

動詞「ねがう」「のぞむ」「いのる」は動詞用法の他に、連用形名詞用法および複合語を構成する用法が見られる。三語は希望の内容による使い分けが見られる。「のぞむ」は広く一般的な希望に用い、「ねがう」は一般的な希望を含みながら基本的には仏教的な希望に用い、「いのる」は神仏に対して希望する傾向が見られる。

字音読みの名詞「欲」は一般的な欲望の意を表すのに使用され、「願」「祈」はすべて仏教用語として使用されている。

全体的に見ると、「たい」は用例数が最も多く、用法も多様に亘る。それ以外の諸形式は用例数が少なく、用法も限られている。したがって、元禄期の笑話集である軽口本においては「たい」が希望表現の中心的存在であるといえよう。

#### 【注】

(1) 柴田昭二、連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告



第1部第109号』平成12年3月。

(2) ここでいう希望表現とは、人の願望に関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称形式「三人称〜たいか」「三人称〜てほしいか」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 注(2) 参照。

(4) 注(2) 参照。

(5) 例(2) 参照。

(6) 注(2) 参照。

(しばたしろうじ

香川大学名誉教授)

(れんちゅうゆう

広島市立大学客員研究員)

(二〇二四年五月三十一日受理)